四十七士（大塩平八郎）

臥新　嘗胆　幾　辛酸

一夜　剣光　雪に　映じて　寒し

四十　七碑　猶　主を　護る

凛然　冷殺す　奸臣の　肝

臥薪嘗膽幾辛酸　一夜劒光映雪寒
四十七碑猶護主　凛然冷殺奸臣肝

解説　四十七士の討ち入りを述べた詩。

語釈　※臥薪嘗胆＝仇を報いたり、目的を成し遂げたりするために、艱難辛苦をすること。※辛酸＝苦労。※一夜＝元禄十五年十二月十四日の夜。※凛然＝すさまじいさま。ぞっとするさま。※冷殺＝ぞっとする程肝を冷やした。※奸臣＝悪企みをする家臣。

通釈　臥薪嘗胆し仇敵を討たんものと、どれほど苦労したことであろうか。元禄十五年十二月十四日、ついに吉良邸に討ち入ったが、振りかぶる刃の光は雪に映えて、一層寒く感じられる。泉岳寺の墓所にお参りすると、今も猶四十七士の墓が、主君を守って周囲に連なっている。これを見たら好臣どもの肝をぞっと震え上がらせることであろう。